産経新聞

平成２３年１月１８日（火）朝刊２１面

関西防災

「文明の逆襲」という視点で災害をみる

福島県や鳥取県で豪雪による交通大渋滞が発生し、自衛隊が出動する事態が発生した。いよいよ、「文明の逆襲」が顕在化してきたと思える。

かつて、豪雪地帯を車や列車で移動するときには、雪に閉じ込められることもあると考えることが常識であった。たとえば、燃料タンク一杯の軽油やガソリンとさらに予備のタンク、いざというときの水や食料を持参するというのは当然であった。

ところが最近、道路や鉄道の消雪機能が向上し、雪道を走るタイヤの性能もよくなり、何の準備もなく、豪雪地帯を移動することが普通のことになってしまった。また、地球温暖化で雪が降ることは少なくなっているが、一方で今回の豪雪のように極端な現象が起こるといわれる。

つまり、雨や雪は降るときはむちゃくちゃ降るし、降らないときは全然降らないのである。つまり、豪雪や豪雨に対する対処方法がどんどん難しくなってくるということである。

社会が豊かになり、便利になるということは近代文明の恩恵である。しかし、そのために数多くの支えるシステムが必要になる。

社会活動が円滑に行われるためには、社会を構成する多くのパーツの〝総合的な〟バランスが要求される。そして、いずれのパーツが支障をきたしても、社会はうまく動かない。うまく動かないということは災害や事故の発生につながることを意味する。

近代文明の恩恵を持続的に享受するためには、その核になる私たちの「生活文化」が継続されなければならないだろう。

なぜなら、文化とは私たちが生活するためのルールであるからだ。文明にもそのルールが反映されているはずである。ルールのない社会は円滑には動かない。

生活文化は、子供のころからの家庭教育や義務教育、あるいはそれを取り囲むコミュニティーや地域文化によってはぐくまれる。それは生活の知恵といってもよい。災害文化はそのひとつである。

「文明の逆襲」が具体的な姿を現しつつあるということは、いびつな形で進行してきた近代社会が、いよいよそこに内包する矛盾を隠しおおせなくなった証拠といえる。

生活文化を豊かにするという行為と関係なく、富や便利さを追求する文明観に支配されがちな現代社会は、あらゆる場面で私たちの社会の安全・安心を脅かす。いいかえれば、文明の進歩だけへの過度の依存が、社会の破綻をもたらしつつある。

16年前に起こった阪神大震災も、そろそろ「文明の逆襲」という視点で再考する必要があるのではないだろうか。

（河田惠昭・関西大学社会安全学部長）